

グリーン教団

第0章

賢者十十カマド

エリー

むかしむかし、ある深い森に庵を建てて、大勢の人々を導く、グリーン教国で一番有名な賢者がいました。

名はナナカマド。年は50歳。

ナナカマドは、人々からいろいろな意見を求められて、その助言の正しさに感謝の言葉と多額の謝礼が送られました。

弟子に囲まれ、幸せの絶頂にいるかに見えたナナカマドには、秘密がありました。体調がすぐれなかったのです。

ある夜、弟子に内緒で、こっそり森を抜け出し、町の医者に見てもらいました。

医者は、「これは病気ではない。体質の変化です。もう治ることはないでしょう。しかし、体をよく休めて安静にしていれば死ぬことはありません。もし無理をして動きづつければ、呼吸困難になり、命を落としかねません。周りに話して、助けを求めることです」と言いました。

ナナカマドは、絶望のどん底に落ちました。

何もせず、弟子の世話になって暮らすくらいなら、いっそ人知れずひっそりと行き倒れて死ぬことを望みました。

そして、森の庵に帰らず、姿をくらますにはうってつけの城の貧民街を目指しました。

歩き続けたナナカマドは、貧民街の真ん中で呼吸困難になり倒れてしまいました。

すると老婆が近づいて、ナナカマドに「大丈夫かね？」と聞きました。

しかし、息のできないナナカマドは返事ができません。もしも声が出ていたなら、「ほっといてくれ！」と叫んだことでしょう。

気がつくとなナカマドは、老婆のテントに寝ていました。

ナナカマドの視線に気づいた老婆が声をかけました。

「気がついたのかね」

「なぜ助けた！」

「口がきけるなら大丈夫」

「ふん」

背を向けたナナカマドは、そのまま三日間眠り続けました。

目覚めたナナカマドは、少し体が軽くなり、座ってられるようになりました。それを見た老婆は、ナナカマドにパンと水を差し出しました。

「こんなものしかないけど、ゆっくり食べるといい」

ナナカマドは空腹を感じました。しかし、ほどこしを受け取ることが許せず、出された食べ物に手をつけず、顔をそむけました。

「ただもらうのは気に入らないかい？」

ナナカマドは言い当てられて驚きました。

「自尊心が強そうな顔をしておる。言わなくても分かる」

「ならばひっこめるがいい」

「まあそうあせることはないさ。どうやら体が重くて動けないようだが、口はきけるようだね。それじゃあ、わたしを楽しませる話を一つ聞かせてくれないかね？」

「わたしは人を笑わせるような面白い話は一つも知らない。この国を治め、人々を正しき道に導く説教ばかりしてきたのだから」

「ずいぶんつまらない生き方をしてきたんだねえ」

「なんだと！！」

「どうせ死んでしまうなら、いっぱい笑った方が得じゃないか。どれ、わたしが一つ笑わせてやろうかね」

そういうと老婆は語り出した。

大きな家と広い畑を持つ若い夫婦は、3人の男の子を授かりました。

長男は、強い力と耐える心を持ち、畑を引き継ぎました。

次男は、賢い頭と人を笑わせる機知に富み、町に出て商人になりました。

三男は、体が弱く、ベッドから出ることができませんでした。しかし、すべてを愛し、自分自身も愛して、いつもニコニコしていました。

誰もが、三男の周りに集まりました。

三男には、密かな願いがありました。それは、家の外に出て自由に歩くことでした。寝る前に熱心に神に祈りを捧げていました。しかし、三男は日に日に弱っていきました。

その祈りをこっそり聞いていた長男が、次男に相談しました。すると次男は家に旅芸人を招きました。

旅芸人たちは、庭で素晴らしい芸を見せてくれました。そして、最後に誰も乗っていない輿を持ち出してきました。

その様子を部屋の窓から見ていた三男は、旅芸人たちに手招きされてびっくりしました。

旅芸人たちは、窓から三男を連れ出し、輿に乗せると音楽を奏でながら村中を練り歩きました。

音につられて、集まった村人たちが、道に並びました。

三男は、奥から手を振り、歓声に応えました。

そうして、再び、窓からベッドに戻りました。

半分だけ願いの叶った三男は、安らかに息を引き取りました。

両親と長男と次男は、天に昇った三男のために毎年歌を捧げました。

老婆が言いました。

「その習慣が広まって、歌を捧げて供養するようになったそうだよ」

「そんな話はわたしは聞いたことがない」

「わたしが作った話だからそうだろうよ。あんたも、わたしが死んだら歌っておくれ。そのための駄賃が食事というわけさ。さあ、だから遠慮なくおあがり」

ナナカマドはためらった。

「わたしは音痴なんだ」

「それならそれでいい。ただ生きてわたしを思い出してくれればいいさね」

ナナカマドはパンに手を伸ばして食べ始めました。

「わたしはベニバナ。あんたの名前は？」

「名前は捨てた。好きに呼ぶがいい」

「ではシラカバと呼ぶことにしよう」

ナナカマドはシラカバとして生きることを決意した。

ベニバナは、シラカバにいろんな作り話を聞かせました。

二人は、穏やかに満ち足りた一年を過ごしました。しかし、出会った記念の日にベニバナが倒れてしまいました。

シラカバは、ベニバナを懸命に看病しようとしていました。

動き続けたシラカバは、どんどん体が重くなっていきました。そして、とうとう呼吸困難になり、ベニバナの隣に倒れてしまいました。

シラカバが目を覚ますと、ベニバナは貧民街の外の大穴に葬られたあとでした。

シラカバは、面倒見切れなかった自分を責めて泣きました。

何日もベニバナのテントでぼんやり泣き暮らしました。

ある日、悪い人たちが来て、ベニバナのテントからシラカバを追い出し、自分たちのものにしてしまいました。

生きる気力を失ったシラカバは、抵抗することもなく、倒れるように路上に寝転びました。

すると走ってきた子どもがシラカバにつまづいて転びました。親がやってきて、「危ないじゃないか！」と怒鳴りました。

シラカバは、重い体を引きずるようにして入口近くの壁に移動しました。
そして、そのまま何日も眠り込みました。

朝、目を覚ますと一人の男の子が座っていました。
シラカバは何も聞きませんでした。
男の子とシラカバは、並んで座って、ぼんやり過ごしました。

夜になり、入り口が閉ざされると、男の子は突然、大きな声で泣きだしました。
「どうしたんだ？」

シラカバが聞きました。
「絶対すぐに迎えに来るからここにいろって言われたんだ。なのに・・・」
あとは涙で言葉になりませんでした。

シラカバは、男の子の肩に手を置き、老婆から聞いた話を聞かせました。
泣いていた男の子は、いつの間にか泣き止んでいました。
そして、周りには、知らない子どもたちが集まっていました。
シラカバが話を終わると、拍手と笑い声が起こりました。
そして、少年が近づいてきました。

「お前捨てられたのか？ 俺たちと来るか？」

男の子は笑顔でうなずきました。

「おじさんも来るか？」

「わたしはここが気に入っている」

「そうか」

少年はポケットからパンの欠片を取りだし、シラカバに差し出しました。

「また何か話してくれ。食べ物と引き換えだ」

「いいだろう」

シラカバはパンを受け取り口に入れました。

食べ終え、一人になったシラカバは、ベニバナに心の中で「ありがとう」と話しかけました。

それから、いつもシラカバは入口のそばにいるようになりました。
バカにされても、憐れまれても、親切にされても、いつも変わらず穏やかに過ごしました。
シラカバの本当の名前は誰も知らないまま、いつしか国で一番有名な賢者ナナカマドの消息は謎となりました。